

勤労本部

に音をあげる 勤労千葉の団交の実績

『デマ号外(その25)』にしみ出た本部の消耗ぶり

数あるデマ情報の中でも、七月九日付発行の『動力車新聞デマ号外(その25)』は、抱腹絶倒! 最高のできばえである。「団交だ! と組合員にウソの宣伝」と仰々しい大見出しをつけては見たものの、逆にこの間の勤労千葉の団体交渉の実績と前進に完全にうちめされている「小屋原交渉団」のくやしさがうかがえて実に面白い。

7・2 団交説明員狩り 出し失敗に八ツ当り

いわく「七月五日付日刊千葉に申五号団交と書かれています。が団交は全くウソであり単なる雑談」サロン会議を当局とやったにすぎない」と書かれていた。「本部」暴力集団よ、ウソをつくらつくらしくもつとキチツと「日刊勤労千葉」を讀んだうえて書いたらどうなのだ。「申五号団交」を報道したのは六月二八日付「日刊」であり、七月五日付「日刊」に書かれていた事は、君達が最も「期待」をかけたつも惨めに破産した銚子支部の名をかたつたデッチ上げ千葉局交渉のデタラメと破産ぶりを紹介したものであるのだ。大恥かいて大破産した、そのショックがよっぽど大きかったと見えて、七月五日付「日刊」による暴露が頭にこびりついてはなれない彼らの消耗感とそのくやしさは想像にかたたくない。

「小屋原交渉団」こそ 先細りのお先まつくら

「申五号団交」が単なる雑談「サロン会議だ」と今さらケチツケをしても、所詮それは引かれ者の小唄というものである。現にこの間の「四月期昇給」「二線高架切換」「年度末退職補充を展望した電車運転士見習配属」「夏季輸送」「申五号団交」等すべて勤労千葉が団体交渉で仕切った労働条件で行われている。

「本部小屋原交渉団」こそ団交とは無縁な、て

いたらくぶりではないか。昇給交渉に名を借りて「三項八号の適用を要求」し、挙句に料亭で当局と酒をくみかわしてドンチヤン騒ぎ(五月一八日)、二線高架交渉には姿を見せず(五月二二日)、夏季輸送交渉には、小屋原しか姿を見せず僅か四〇分で終る(六月一九日)という「団交」の名をもてあそぶデタラメぶりではないか。

珍無類のケチツケ

また、同じ「デマ号外」に子供ダマシの図を添えて、「千葉勤労には、規約に地方本部がないからやがては千葉局との交渉もできなくなる」等と書きなぐりケチツケをしたつもりになっている。勤労千葉が「本社」と交渉しようと、「千葉局」と交渉しようとおおきな世話である。われわれは、交渉課題そのものによって交渉相手を決めるのである。

千葉局に係わる交渉案件を勤労千葉が行うのは至極当然ではないか。事実すべての申し入れ事項は本社、千葉局あてに提出し、その都度団交を行っているのが今日の勤労千葉の運動である。

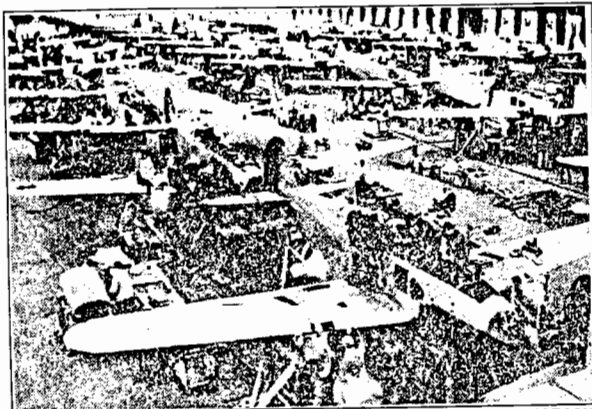
「本部」暴力集団よ!

組合員にウソをついては組合役員として失格ではないのか。貴重な組合費を出来もしない「千葉再建オルグ」や「ウソとデマの宣伝費」に浪費するならするでよし。だがしかしその都合に応じて勤労大改革運動は全国で増々前進するのだ。

産報運動と労働運動の危機

(二) 左派組合を次々と除名し、「産報化」への道をたどった総同盟

当時、戦争と軍需産業への動員が増加の一途をたどり労働力の不足がますますひどくなる中で、労働者は極めて劣悪な条件下で酷使されていた。低賃金、連続三三時間もの超長時間労働を週四回というような過酷な労働は、生活苦に加え「工場結核」等の罹災者を続出させ、窮状にたえかねた労働者の自然発生的闘争が、小規模組合を中心



軍需産業の優遇 資源不足の進む中で、大衆

消費生活の圧迫と非軍事生産の縮小をとともなう、直接戦力となる軍需品生産が強行された

にひんばんに闘われていた。

こうした労働者を指導すべき合法指導部たる「総同盟」は、すでに左派組合を次々と除名・追放し右傾化を深めていたが、一九三七年、「罷業絶滅宣言」を契機に、「産報運動」の積極的推進者へと転落していった。当時総同盟幹事であった西尾末広などは、一九三八年、国会で国家総動員法賛成演説を行ない、しかもその中で当時の首相であり「産報」の翼賛運動の提唱者であった近衛文麿を「ヒットラー、スターリンのような指導者たれ」と叱咤激励するところまで侵略戦争の尖兵として純化していったのである。

(つづく)